

博多独楽

桑木彥雄

故竹田秋楼氏著『日本南国物語』（大正十四年版）に、博多古名物として博多独楽の話がある。博多に昔からあった独楽は木製、円錐形で、尖端を地面につけ、麻の緒又は布片等で打ちてまわす、所謂打ち独楽又は叩き独楽で

博多のもの（者）のこまうつは、ぬのしゝと唐獅子と韓惣合からそつあひにて王調伏

とうたつて打つたものであるという。竹田氏は韓惣合とは麻の緒のことと註しているが、『石城志』には、うたの下半句、ぬのしゝかのしゝかんてうあはせてわうてうふく、とあり、かんてうとは韓当とも書くところある。こまうつは高麗（こま）を伐つにかけ、往時対外関係の密接であつた博多では、かりそめの兒童の遊戯にもこううたわれたと解する竹田氏の説には無理はない。又『石城志』に、「いつの頃にや唐人より習ひ得てこれを作る、世に博多独楽とて之を賞す」とあり、延宝の頃、惣三郎とて良工あり、今もよきこまを惣三ごまとていうとある。又竹田氏は、鉄の心棒を通し、手でひねり又は麻の緒を巻きてまわす独楽を博多では韓惣ごまとていうと記す。又元禄中博多の人市太郎というもの、京都に上り曲独楽を打ち、大評判をとる、禁裏に召され其技叢覧あり、御独楽宗匠と号を下さる、其後あまねく五畿七道を興行すとある。

独楽の異名をジャイロスコープと称し、其運動の原理は力学の理論の一中枢をなして居る。私の好事心は独楽と博多とに深き縁ありという如上の竹田氏の記述にそそられて、独楽に関する考証を思い立たしめたが、俄にわかに手近の極めてありふれた翻刻本等をあさつたに過ぎない。

先ず『益軒全集』を繙くに、第七卷、和爾雅の嬉戯具の條に

空鐘（たうごま、独楽に同じ）、陀螺（ぶしやうごま）

と名を挙げてあるが解説はない。『和漢三才図会』（正徳二年、一七二一年出版）には図入りで

「独楽、和名古未都玖利、『弁色立成』に、孔ある者なりと云ふ。按ずるに、独楽、海螺弄（次出）と物異にして趣は同じ、蓋し海螺は多く賭になして勝負を見る、独楽は賭になさず、故に之を名くるか、其製一ならず、近世筑前博多の独楽、木を削り蓮房の形の如くし、大さ拳ばかり、鉄釘を以て心となして、綿繩を転巻し、之を引舞はず、元禄年中盛んに行はる、習練を得るもの織枝或は糸繩の上に於ても亦之を舞はしむ」（原漢文）

次に、

「海螺弄、按ずるに何の時代より始まるといふを知らず、田夫野子の弄ぶ所なり、海螺の空殻を用ひ、頭尖を研平し、尻尖をすりまろめ、糸繩を巻いて引いて之を席盆中に舞はず、一三螺以て勝負をなす、撃出さるゝものを負となす、其の先づ入るものを伊加と云ひ、後に入るものを乃宇といふ、撃合ひ同じく出る、之を張るといふ、張れば伊加を勝となす、凡て紀州熊野より出づる海螺厚くして堅し」とある。

喜多村信節の『嬉遊笑覧』（文政十三年）巻六下、兎戯の條に

「独楽、ぶせうごま、はかたごま、ばいごま、ちたんぼう、たうごま、木ばち廻し」

と割註があり、数多の引証と長き解説がある。先ず名称については、『今昔物語』の中に「獵鶉の如くくるく」とまはりて」とある。鶉はこま、鶉はつぶりと訓むとある。源順の『和名類聚抄』に依りて、初め独楽を、ツムクリともコマツクリとも又コマツブリとも称しを知る。『笑覧』の著者は、「コマといふはもと高麗より渡りしものなるにや、ツクリ、ツブリ、ツムリはツムクリの略、粒粟の義か、今、物の矮短なる貌をツングリと云ふと同義なるべし」

と云っている。ツブリはま、ひま、ひつ、ぶり、などいうにも所謂いわゆるディミニユティブの意で、後世之を略してコマツクリを単にコマと称するに至ったとすべきであろう。然しかしながら又、コマツクリのコマの字源については若もし狛犬の狛の訓は高麗のコマより来るとする外に小馬のような犬とする説もあり得るとすれば、独楽も立って舞うので「駒」とでも名付けたのが訓となったのではなからうか、同様に動くものの意で将棋の駒という名も出たのではなからうか（この説成立たぬ如し、後條参照）。『嬉遊笑覧』には又博多独楽は緒を巻いてまわす、漢土に惜千々というものはなべしと、寛文年間の記録を引き、ぶせうごまについては慶長年中の『犬双紙』に「た、けばめぐるぶせうごま」とあり、支那に陀羅というものと同じく、支那にて元来螺をまわしたるに始まったのであらうかという。たうごまは支那の空鐘、「たうごまの花のうなるやあぶのこゑ」（重利）その声ごとと鳴る故江戸の兒童ごんごんごまといふとあり、又『長崎歳事記』には「たうごま又象ごま、其ひびき象のうなるにたとふといへども象の声知るもの少し」とあり、又長崎では叩き独楽を鞭ごまというところある。英語のホイップ・トップというときながら同じ。

所謂いわゆる独楽文学としては先に引いた『今昔物語』の一節と略ほ同じきもの『宇治拾遺』にもあり、又『太平記』に「長講堂の大庭に独楽を廻して遊べる童」なる文字あり、又『寛永発句帳』、慶友が句に「日にまうやこまのわたり瓜茄子」、西鶴『一代男』に「よい年をしてばい、まはし」、ばい、は既記の螺、浄瑠璃『彦山権現』には「張はどうぢやと胴取がこまの心木を捻廻し」など。江島其磧の『色三味線』に「この頃九州より独楽廻の少人のぼりて四條河原の小芝居にてさまぐの曲ごまをまはし、数万の人を取りて歴々の大芝居をすからせけるが、なほさかりになりて町々にこのこまをもとめて家々に玩びし、後は狛五つ六つ或は十、二十買求めてあるを、おしならし一町に二百づゝとつもりて、狛一つ十二文づゝにして此代二貫五百文、凡そ京中三千町、狛の銭高七千五百貫、銀になをして百五貫余なり」云々。

有朋堂文庫の中、伴蒿溪、『閑田耕筆』に、「『和名抄』に独楽、和名、古末都玖利、有孔者也とあり、然るに行

成大納言小松ふりといふものに、むら濃の糸を添へて奉り給ふと云ふこと小世継に見ゆ、くりとふりとは通へども廻すとき振るものなればふるは言のもとか。糸もて廻すものなれば、糸を添へたまふもきこえたり、有_レ孔者なりとの註は今の世のさまに異れば心得がたし、もし孔に糸を通してまはせしにや」とある。フリを振りと読んだのは既記『嬉遊笑覧』とは異った一説であるが、孔に糸を通せしものかと云う推量面白し、後に弁ずる。又柳亭種彦の『用捨箱』には、元禄の末、宝永の初に銭独楽というもの流行したことを書いてある。文銭を幾つかつなぎ、筆の軸を貫き、別に心木を通し、糸を巻いて廻転の機をもうけたもので、之を愛して銭独楽の記を作ったものがあり、独楽に名づけて柏崎、松風など号せしめた。これらの謡曲の曲をうたう間舞い止まざりしたためかなどある。

『三省堂百科辞典』には博多独楽、鉄胴独楽、吟独楽、鞭独楽の図がある。鉄胴の当独楽は天保の頃江戸浅草の玩具問屋美濃屋交翁に出づるとある。同辞典「独楽廻し」の項は幸堂得知翁の筆に成り、『笑覧』に同じき、元禄年中独楽芸人風俗に関する禁制の事を記し、又幕末明治初年の曲独楽師について記してある。『広文庫』の独楽に関する文献も略ぼ前述に尽きている。

支那に於ける独楽に関する文献はモリソン文庫あたりに探れば又或は得る所あるであろうが、前記諸書に依りても、陀羅、惜千々、空鐘、地雷、地踏々房などの漢名あることを知ることができる。「独楽」と云う字に就ては先に記したように『三才図会』には賭になさずして独り楽むという意かとある。『孟子』梁惠王、独楽楽與人樂敦樂の初めの樂は音楽してにあり、後に記すマレーの王様の如く独楽を廻して楽むにあらぬが、『嬉遊笑覧』に独楽と陀螺と音同じとあるから、陀螺が名の起りで、独楽は当字とも解されぬであろうか。但意義未詳。

『帝京博物略』に、揚柳児活抽陀螺とあるを『嬉遊笑覧』に西鶴が『大鑑』に、「是も秋の末より螺_{ばい}つくはやらし」とあるに依りてその冬の遊びらしきと季節違うとある。我国で今独楽遊びは先ず正月のものであるが、螺まわしなどは夏の海浜に都会の兒童の興じそうな遊戯である。

『マレー・マジック』という、そこに領事をしていた一英人の著書に、マレー地方では貴賤老若挙げて独楽遊びを好むと記し、王者も之を玩ぶについてキップリングの詩を引いてある。所謂寿命比べの遊びである。又 Teetoun と称し、竹筒をまわす捻り独楽があり、英のハンミング・トップと同じきが支那伝来のものと記してある、又『大英百科全書』に、欧洲には古く、ホーマーの『イリヤッド』、プラトリーの『共和国』にも独楽遊びの記載があり、英国にも十四世紀頃よりその記録ありとし、Top は Topl 又は Tot と通じ、壺の意もあるは形の上からであろうとし、ギリシャでロンバス（英語読み）というは菱形の板の中央に孔を明け糸を通して廻せば捻りを生ずる。ギリシャの神事に於ける祭具の一という。濠洲の土俗に、英人のブルロアラーと名くるもの之と全く同巧のものらしく、土人はその捻り声に大なる恐怖、心を抱き、此具を神聖のものとして婦人小児に見せしめず、密林の中厳かに之を扱うという。先きに引いた『弁色立成』（『和名抄』に少しく先つてできた著者不詳の二辞書）に「孔あるもの」と記し、閑田耕筆に、「糸を通して廻せしにや」とあるを想起せしめるが、我国の巫筮方術の中に類似のものがなくと求めたが採し当らなかつた。

曲独楽については、筆者の幼少の頃、東京牛込赤城下に芝居小屋があり、そこで芝居がかりの竹沢藤治（二代目）の曲芸を見たことがあつた。独楽の衣紋流し、煙管止め、刀渡りなどの外、一つの独楽が仕懸けの道を廻り廻りて一の扉に行当れば、扉自ら開けて中より、先きにその独楽を廻した太夫が早替りで独楽を受止めながらあらわれ出でたことなどを記憶している。

ジョン・ペリーの著『スピニング・トップ』（一八九〇年大英学術協会通俗講演）は独楽力学の重要な一文献であるが著者は嘗て東京大学の御雇教師であつたので、其頃、浅草観音奥山で曲独楽を見た話がこの書の初に載せてある。テンプルの赤い柱、桜の花などの形容を加えて極めて物珍らしく刃渡りの曲独楽などを見たことの記載があり、一曲を終ると見物人から銭を集める仕草まで述べ、然かもそこに凡て日本らしい優美さのあることを讃えてあ

る。恐らくここでペリーが見たのは松井源水一派のであったであろう。独楽芸人について尚想い起すは『サンデー毎日』かに白井喬二氏なりしか所謂大衆文芸いっしゅぶんの続き物に、幕末に独楽師が京都流と江戸流とで秘術を尽して争ったことが仕組んであったことである。

又当年（昭和二年）新製の島崎藤村氏『いろは加留多』に

「こ、独楽の澄むとき、心棒の廻るとき

とあり、之に伴う岡本一平氏の絵には、指の先きで独楽が立って舞っている、西俗、このすんでいるのをこまが睡ると云い、頭をふり出せば覚めたと云い。摩擦がないならば「睡り」が覚めるには外力が働かなければならない。独楽文献を尚一つ。古賀十二郎氏著『長崎市史風俗篇』に、とうごま、象ごま、ぶしょうごま、鞭ごまの外にはんどうごま、坊主ごまの名を挙げ、独楽の勝負に

いきなが証文しやうくらべ、ヨイ、ヨイ

と、うたうと記してある（昭和二年一月、『福岡日日新聞』所載）。

大熊浅次郎氏に従へば幕末福岡藩の志士金子才吉氏の折句に

博多こま

春くれと霞かれたる高ねにはこそそのみ雪のまた残りけり

とある由。

又、竹林熊彦氏によれば、『倭訓栞』に「独楽といふも高麗より出たるか、『日本紀』に高麗の軍兵歌楽興楽といふ楽をこまと訓ぜり」とあるを示さる。『日本書紀』雄略八年二月の條参照。

又、散木和歌集隱題こまつぶりに「春の野にこまつぶりつむ淡雪のけたずておりて家づとにせん」とあり、又京都新村博士来翰に「こまぐ」と御考証おもしろく拝見、但し「ユマ」の語原考は尚研究の余地あるべく」云々。即

ちコマ駒説は一先ず取消と定む。

(昭和六年七月、『都久志』)

- 桑木或雄著『科学史考』（河出書房、昭和一九年）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。